[概要]

本研究では，少子高齢化によって過疎化が進行する中山間地域である，富山県富山市八尾地域に居住する高齢者を対象に，地縁・血縁に由来する強固な地域コミュニティの醸成は，高齢者の買い物に対する困難さを補っていると仮定してインタビュー調査を実施し，日本におけるフードデザートの概念を援用しそれらを分析した．調査から高齢者の多くは自家用車やバスを利用して麓のスーパーに向かい買い物をしており，その際に買い物に対して感じる困難は，サロンなどの地域活動や相互扶助の精神によって高齢者たちの社会的孤立を防ぎ，知的能動性や社会的役割が向上することによって生まれる「買い物は日常の楽しみ・生きがい」という意識によって軽減されているということが読み取れた．しかし，この結果からは八尾地域及び八尾地域の在住する高齢者が，日本における FDs の定義に当てはまっていると明らかにすることはできなかった．また，本研究は地域コミュニティや相互扶助の精神という視点のみで FDs の枠組みを用いて分析を行ったため，八尾地域において FDs が発生しているか否かを完全に解明することはできなかった．